

家庭科

馳 裕紀子

1 家庭科における「よりよい未来を志向する子」

新学習指導要領において、家庭科における資質・能力については、実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見いだして課題を設定し、それを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを基本的な考え方としている。

そのため、本校の家庭科では、衣食住などに関する知識及び技能を身に付け、それらを家庭生活の中に取り入れ、実践していくことを通して、子どもが家族の一員として自分の生活をよりよくしようとすることをめざしている。そのため、製作、調理などの実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動に目的意識をもって取り組むことができるようにし、このことが実感の伴った理解につながり、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることができる考える。また、生活環境の異なる友達と自分の生活について話し合い、交流することで、新たな気づきを得ることができる。これらの身に付けた知識及び技能や新たな気づきが、家族の一員として自分の生活の中で実践しようとする子どもの育成につながっていく。

家庭科における「よりよい未来を志向する」とは、身に付けた知識及び技能を自分の生活場面にあてはめ、生活をよりよくしようと考えをくり返し、生活場面で使えるようにしていくことである。そのためには、生活経験をもとに身近な生活事象をふり返ることで、「もっとこうしたい」「なぜこうするのだろうか」といった思いや考えをもつ。そして、実践的・体験的な活動を行い、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けたり、生活に欠かせない行為のよさを実感したりすることが重要である。

以上のことから、家庭科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 題材のゴールをイメージし 本時の課題意識・目的意識をもち 自分の生活をよりよくしようと学び続ける子
- ・ 他者の思いや考えを共有し 多様な視点で生活事象及び自分の生活を見直す子
- ・ これまでの学びを自分の生活に当てはめ 自分の生活をよりよくしようとする子

2 家庭科における未来へ生かす決める授業デザイン

題材導入時に自分の生活場面をふり返る活動を行う。生活場面をふり返ることで、これまで特に意識することなく行っていた生活事象を意識し、なぜそのようなことをするのだろうか疑問に思うこともあるだろう。また、生活場面を想起し、それぞれの思いや考えを話し合うことで、学習することに対するイメージが広がると考える。これらが学習に対する関心を高め、題材を通しての課題意識・目的意識をもち、学習計画を立てる(決める)ことにつながっていく。

子どもは、それぞれの生活環境が異なるため、同じ生活事象に目を向け、かかわったとしても、同じ見方・考え方をする子どももいれば、異なった見方・考え方をする子どももいる。かかわることを通して、「同じ考え方だが、していることが違う」「していることは同じだが、考え方は違う」などの気づきがあるだろう。このように他者とかわることで、自分の見方・考え方を広げたり深めたりし、自分の考えを更新していく(決める)。

毎時間の授業で、ふりかえりを行う。考えたことやわかったこと、できるようになったことをふり返ることで自分の考えを再構成することができる。また、家庭での様子を想起し、本時の学習と結び付けることから、自分の生活での実践にもつながりやすくなるだろう。

題材終末時には、子どもが本題材の省察を行う。わかったこと、できるようになったことをふり返り、明確にすることによって自己の成長を感じるとともに、自分の生活で実践してみようとするだろう。その上で既習をもとに、自分の生活がよりよいものになるよう、どのように実践するのかを決める。自分の生活の中で実践することができれば、さらに自己の成長を実感するとともに、家族にほめられ、家族の一員だと改めて感じるだろう。そして、この経験が

これからの生活を送る上で、より豊かな生活を創っていかうとすることにつながっていくと考える。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

家庭科では、身に付けた知識及び技能を家庭で実践することが重要である。そのため、題材終末時に自分の生活で実践することを考え、これまでの生活をふり返った上で、題材を通しての課題を決める。そして、その課題を意識しつつ1時間ごとの課題をつくる。こうすることで、課題を追究する意欲が高まるとともに、目的意識をもって製作、調理などの実習方法を決め、学習を進めることができる。これらをくり返すことが、日常生活に必要な知識及び技能が身に付けさせ、自分の生活での実践への意欲を高めることにつながる。

題材導入時の生活場面をふり返る際にはワークシートを用いる。ワークシートには本題材で学習する内容にかかわる自分の生活をふり返り、記述する。可視化することで、あまり意識することがなかった生活事象について改めて考えるきっかけとなる。そして、記述したことをもとに話し合うことにより、自分の考えと友達の考えとの間にある共通点や相違点が明確になり、学習することを焦点化することができる。

また、学習する上で大切なキーワードを示すことで、同じ方向性で考えることができるようにすることもある。例えば、季節に合った過ごし方を考える際、始めに「快適」という言葉を示す。子どもは生活場面を想起し話し合うことにより、夏であれば「すずしい」や「べとべとしない」など具体的なイメージをもつ。イメージをもった子どもは、家族の様子を見たり聞いたりし、自ら課題について考えるようになるだろう。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

日常生活に必要な知識及び技能を身に付けるには、実践したり体験したりすることが大切である。しかし、考えることなく実践や体験をしても、実感が伴っていなければ、知識及び技能が身に付いたとは言い難い。そこで、子どもやグループが課題の中にある多くの観点の中から一つの観点を決め、そのことについて試したり調べたりする活動を行う。試したり調べたりしたことを互いに伝えたり、受けとめたりすることで、課題を解決することや、より広く深い実感の伴った理解につながる。

これまで意識することなく行ってきた日常生活の行為が、友達と交流することで、その行為の価値や利点に気付いたり、新たな行為を知ったりすることもある。交流を通して、自分の生活の中の必要な行為に気付き、自分の生活の中に取り入れようとすることもあるだろう。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

毎時間、授業終末時にふりかえりシートを用いてふり返る。ふりかえりシートに記述するためには1時間の授業を通して何がわかったのか、できるようになったのかを自分の中で再構成することになる。これからしてみたいことを記述することで、自分の生活でどのように実践するのかを決め、実践への意欲を高めることができるだろう。

題材終末時には省察を行う。わかる、できるようになったことを、1年を通して「1年間の学び～家庭科の学習を通して～」という1枚のワークシートに書き足していく。少しずつできることが増えていくことで、自己の成長を実感することができるだろう。この学習をどのように生かすか、次にどんなことを学びたいかについては、省察シートに記述する。生かすことについて改めて考えることで、自分の生活で実践することへの意識を高める。

そして、既習をもとに家庭実践計画書を作成する。だれのために、何をするのかを決め、計画書に記述する。相手意識を高めることにより、学習したことをもとに、自分の生活に合ったものへと工夫することにつながるからである。家庭での実践後、実践したことを文や写真などで記録し、家族からコメントを書いてもらい家庭実践報告書とする。家族からのコメントは満足感や達成感、家族の一員であることを改めて感じ、次の実践への意欲を高め、生活をよりよくすることへとつながっていく。このような計画、家庭での実践、ふり返るといった経験を積み重ねることにより、これからの自分の生活に自発的にかかわり、より豊かな生活を創っていくのではないかと考える。

4 実践例

未来へ生かす決めるを促す授業デザイン～ふりかえり・省察から見えてきたこと～

①6年「レッツ クッキング Part3 ～いためる技をゲット!～」の実践

本題材は2年間で学習する食領域の三つ目の題材で、いためる特性と目的に応じたいため方について学習する。調理する時間や順序、切り方など既習であるゆでる調理と共通する点が多くある。しかし、ゆでる調理について学習してから約1年経っていることから、本題材を学習する前に省察を行った。省察を行うことにより既習を確認するとともに、子どもの実態を把握しようと考えたからである。省察では、題材の始めと終わりをくらべて、「わかる(できる)ようになったこと」、「この学習をどのように生かすか」、「次にどんなことを学びたいか」の3点についてふり返った。すると、調理のポイントであるゆでる時間や順序についてわかるようになったと記述している子どもが多い一方で、切り方について記述している子どもは多くなかった。そこで、切り方について考えることができるよう、本題材ではにんじん、ピーマン、もやしの三色野菜いためを取り上げ、学習することとした。

本題材では毎時間、L(わかったこと)、F(友達の見でよと思ったこと)、T(これからやってみようこと、感じたこと)の3点に分け、記述によるふりかえりを行った。また、題材終末時には題材を通してわかる(できる)ようになったことを「1年間の学び～家庭科の学習を通して～」というワークシートに書き足すようにし、別紙省察用ワークシートには、

	A	B
材 料	にんじん、ピーマン、もやし	
調味料	塩、こしょう	
切り方	バラバラ	もやしに合わせて
時 間	5分	3分
順 序	全て同時	硬いものから
火 力		中火

この学習をどのように生かすか、次にどのようなことを学びたいかの2点について記述し、省察を行った。

いためる調理の特性や調理の仕方に焦点化するよう食材の種類と量をそろえた。その上で、切り方、いためる時間、いためる順序の3点の調理の仕方を変えたものを試食した(資料1)。試食を通して、子どもはいためる調理のポイントを見つけ出していた。切り方やいためる時間、いためる順序、火加減は既習を生かし、調味料を入れるタイミングや電子レンジであたためるという考えは自分自身の生活経験をもとに導き出したのではないと思われる。試食後、いためる調理のポイントについて個人思考をし、その後グループで、そして全体で意見交流を行った。資料2は本時用いたワークシートである。個人で考えたことをワークシートに記述した後、交流を通して得た考えをワークシートの2に追記するようにした。いためる時間、火加減などいためる調理のポイントとなるものも書かれているが、フライパンについて記述しているなど、まだ頭の中が整理されていない状態であることがうかがえる。しかし、終末時に行ったふりかえり(資料2下部)には、Lに「いためる時間が関係していそう」と書かれている。このことから、ふりかえりを書くことを通して本時の学習を再構成し、いためる調理のポイントは時間ではないかと自分で結論付けている。また、Tには、「いためる時間、火加減、調味料を入れる手順などのいためる調理のポイントについて調べてみたい」と書かれていることから、子どもが次時の調理のポイントを検証する試し調理についての意欲を高めていることがわかる。これらの子どもの様子から、試食を通していためる調理の

資料1 2種類の野菜いための違い

野菜いためA		野菜いためB	
材料	にんじん・ピーマン・もやし	材料	にんじん・ピーマン・もやし
調味料	塩・こしょう	調味料	塩・こしょう
いためる	調理方法	いためる	調理方法
時間	5分	時間	3分
順序	全て同時	順序	硬いものから
火力		火力	中火

1. 野菜いためAと野菜いためBを比較してみよう。

野菜いためA	野菜いためB
材料	材料
調味料	調味料
いためる	いためる
時間	時間
順序	順序
火力	火力

2. 野菜いためAと野菜いためBの調理のポイント(ちがいは何だと思いきか)を比較しよう。

野菜いためA	野菜いためB
1. 材料	Bより多い
2. 時間	Aより短い
3. 順序	最後に入る
4. 火力	最後に入る

4. ぶりかえりしましょう。

L(わかったこと)

○野菜いためAとBでは、いためる時間は、関係があります。

F(友達の見でよと思ったこと)

○□せんべい、Aの野菜いためは、つやが、とてもいいです。

T(これからやってみようこと、感じたこと)

○7分では、野菜いためる時間をもう少し短く、予想した火加減、調味料を入れたら、美味しく出来ました。

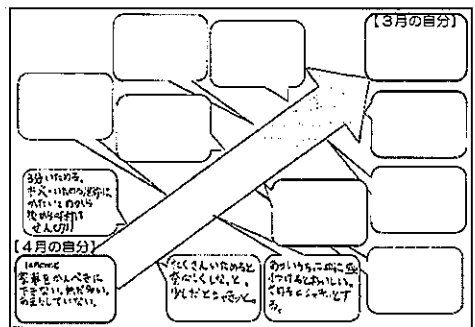
○友達から、野菜いため、を出さなくていいので、と勧められました。

資料2 いためる調理のポイントについて考えているワークシート

ポイントを考える授業の流れは、子どもの思考の流れに沿っていたと考えられる。次時は、いためる時間、いためる順序、切り方、火加減について試し調理をする予定であった。しかし、電子レンジであたためることについても調べたいという子どもの意見がふりかえりに書かれていたことから、調理後に電子レンジであたためることも試してみることにした。試した結果、電子レンジであたためたものもあためないものも、あまり変わりなかったという結論であった。実際に試したことで、いためる調理に電子レンジは必要ないということが明確になり、子どもが調理の仕方を理解することにつながった。試し調理のふりかえりも当初の計画通りL・F・Tの観点で行った。しかし、学習をふり返る形式としては十分ではなかった。調理実習で教師がすべての子どもに対して個別指導することは難しい。そのため、同じグループの友達に教えてあげたり教えてもらったりすることも多いだろう。友達とのグループ活動について、もう少し丁寧にふり返る必要があると感じた。また、何を書けばよいのかわからない子どもが見られたことから、ふりかえり欄には友達の意見でよいと思ったことと表記されているが、友達から学んだことなど友達の意見にこだわらないような表記の方が活動をふり返りやすいのではないかと思われる。

本題材では第2次の学習を終えて省察を行い、第3次で家庭での実践計画を立てた。わかったことやできるようになったことは「1年間の学び～家庭科の学習を通して～」という1枚のワークシートに書き足していく(資料3)。そこには、「いためる調理のポイントがわかった」「いためることができるようになった」という記述が多く見られた。このように、わかったことやできるようになったことが増えていくことから、自己の成長を実感することができるだろう。また、省察用ワークシートには、「夏休みなどの時に一人で作りたい」など家庭での実践を意識している記述(資料4)や「将来一人暮らしをした時に役立ちそう」など、現在の生活だけではなく、未来を意識したものも見られた。また、「かたいものからいためることは他の料理にも生かせそう」という記述は、いためる調理だけではなく既習であるゆでる調理での学習を結び付けて考えていることがわかる。これらのことから、省察を行うことは、学習を未来へとつなげたり、汎用的に考えたりする手だてとして有効であると考えられる。

いためる調理のポイントを確認した上で、家庭実践計画を立てた(資料5)。だれに、どのような野菜いためをつくるのかを決め、相手意識・目的意識を明確にした。資料5のワークシート2、3には、妹のための野菜いためということで、妹が食べやすいじゃがいもやコーンを食材として用いていると書かれている。また、第2次で



資料3 本題材第2次を終えての省察(わかったこと)

レッツクッキング Part3～いためる技をゲット1～ 6月3日

1. これまでの学習をふり返りましょう。

1) 題材のしめとおわりをくぐらべて、分かる(できる)ようになったことは何ですか。
「1年間の学び」に書きましょう。

2) これからの学習をどのように生かせようですか。
これからこの学習を家で何か作るときに生かしたいです。
野菜1たの白に、近い野菜いためを作るためのポイントを使います。
夏休みなどの時に、一人で作りたいです。
また、かたいものから、入れることは他の料理にも、生かせるので、生かしたいです。

3) 次にどんなことを学びたいですか。
次に野菜1たの以外の料理も作りたいです。
野菜1たの調理のポイントに比べて、作りたいです。

資料4 本題材第2次を終えての省察

レッツクッキング Part3～いためる技をゲット1～(No.6) 6月3日

くぐらぶようにお返しいためし、たすけ「か」る)

1. 野菜1たのための調理のポイントは何でしたか。

1) いためる時間 - 3分	2. 野菜1たの調理方法
3) 野菜1たの切り方	4. 野菜1たの調理方法
5) 野菜1たの調理方法	6. 野菜1たの調理方法

2. お家で野菜1たのための調理をします。

【だれに】	【どの野菜】
お母さんや妹	じゃがいも・コーン・きんぴら

3. どんな工夫をしますか。

- 野菜1た、じゃがいもやコーンに油を塗ります。
- 野菜1たを入れます。
- 野菜1たを焼きます。

4. 食料、調理手順を覚えましょう。

【食材・調味料】	野菜1た	油	塩	コショウ	醤油
【調理手順】	1. 野菜1たを少しだけ切ります。野菜1たを切ります。2. コショウ・塩・醤油を野菜1たにかけます。3. 野菜1たを焼きます。4. 野菜1たに塩・コショウを入れます。5. 野菜1たを焼きます。6. 野菜1たを焼きます。完成!				

5. 学びかえりをしましょう。

【わかったこと】	【これからやってみたいこと、思っていること】
野菜1たの調理方法を覚え、野菜1たを作ることができました。野菜1たの調理方法を覚え、野菜1たを作ることができました。	夏休みの前に、野菜1たの調理方法を覚え、野菜1たを作りたいです。また、野菜1たの調理方法を覚え、野菜1たを作りたいです。
【友達や家族に教えたこと】	【友達や家族から学んだこと】
野菜1たの調理方法を教えました。野菜1たの調理方法を教えました。	野菜1たの調理方法を教えました。野菜1たの調理方法を教えました。

資料5 家庭での実践計画を立てたワークシート

学習した野菜の切り方やかたいものからいためることを生かした調理手順となっていることがわかる。その学習後のふりかえりには、Lに「いためる調理をふり返り、まとめることができ、それを応用し計画を立てることができた」と記述しており、これまでの学習を省察している様子がうかがえる。また、T（これからやってみたいこと）には、「夏休みの宿題に野菜いためを作るけれど、その前にも一度自分で作ってみたい」と家庭での実践に意欲を示している。これらのことから、家庭実践計画を立てることが本題材での学習を省察することにつながっていると考える。

②5年「レッツ トライ ソーイング Part1 ～マイミニきんちゃくづくり～」の実践

本題材は2年間で学習する衣領域の一つ目の題材で、手縫いについて学習する。この学習をもとに、2学期にはミシン縫いについて学習し、第6学年では手縫い、ミシン縫いを目的に応じて使い分け、生活に役立つ袋型のを製作する。初めて裁縫を学習し、今回の学習が今後の衣領域の製作に関する学習の基礎となるため、裁縫用具の安全な取扱いについてしっかりと理解させるとともに、玉結びや玉留め、並縫いなどの基礎的・基本的な技能を身に付けさせることが大切である。そこで、本題材では、L（わかったこと）、F（友達の意見でよいと思ったこと）、T（これからやってみたいこと、感じたこと）の3点について、記述によるふりかえりを毎時間行うとともに、技能面についても資料6にあるような観点をあげ、記号によるふりかえりも毎時間行った。

第1次1時で裁縫用具の安全な取扱いと玉結び、2時に玉留め、3時に並縫い、4時にボタン付けについて学習した。資料6は、4時学習後に行ったA児の技能面のふりかえりである。玉留めが△となっている。また、記述によるふりかえりには、Lに「玉留めははじめは×だったけれど、とちゅうから自分でできるようになった」、Fに「親指で布と針をいっしょに持ったらできた」と記述している。これらのことから、友達に教えてもらったことで玉留めができるようになってきたが、うまくはないと自己評価していることがわかる。また、

針穴に糸を通すことができた。	○
玉結びをすることができた。	○
玉どめをすることができた。	△
なみぬいをすることができた。	○
ボタンをしっかりとつけることができた。	○
安全に気をつけてさいほう用具を使うことができた。	○
あとかたづけをきちんとすることができた。	○

資料6 A児の技能面のふりかえり
(第1次4時)

針穴に糸を通すことができた。	◎
玉結びをすることができた。	◎
玉どめをすることができた。	○
なみぬいをすることができた。	◎
ボタンをしっかりとつけることができた。	◎
安全に気をつけてさいほう用具を使うことができた。	◎
あとかたづけをきちんとすることができた。	◎

資料7 A児の技能面のふりかえり
(第1次5時)

L（わかったこと） 真っすぐ美しく縫うためには、いろんなテクニックを生かして、縫っていかねばいけないことを知った。 F（友達の意見でよいと思ったこと） Bさんの一気に針を通して引っぱるという方法が、とても速く美しく縫えたのでよかった。 T（これからやってみたいこと） もってきたいいろんな色糸を使って、かわいく、お気に入りとなるきんちゃくを作りたい。
--

資料8 C児の記述によるふりかえり
(第1次5時)

記述によるふりかえりに、Tの欄に「まっすぐに縫いたい」「縫い目をそろえたい」という記述が見られた。

そこで、5時は玉結び、玉留め、並縫いの習熟を図る学習とした。<どのようになればきれいに縫えるのか>を課題とし、玉留めと並縫いに分け、きれいに縫うポイントについて全体で交流する時間を設けた。玉留めでは、玉留めの球が布から離れてしまうという問題点もっている子どもが多くいた。そこで、上手くできている友達が、玉留めをするときに縫い終わったところに針を置き、針を布から離さないようにすればよいという意見を述べた。また並縫いでは、真っすぐに縫うには、目印となる線をチャコペンシルで引けばよいという意見や、縫い目をそろえるために点線にすればよいと意見が出された。さらに、意見を述べることはできなかったが、2～3針まとめて縫っているB児がいたので、教師が代わりに説明をした。様々なポイントを確認した上で縫う練習を行った。

資料6と資料7を比較すると、A児は玉結びを除くすべての観点が○から◎に、玉留めについても△から○となっていることから、技能の高まりを感じていることがわかる。このことから、同じ観点で毎時間ふり返ることで、自分の成長を感じることが出来る。また、C児は全体交流の場で話されたB児のポイントを取り入れ、縫ってみたところ、とても上手くできたと述べている。しかし、C児は4時後のふりかえりで「縫い目をそろえる」「真っすぐを意識して」ときれいな仕上がりについては意識してい

るが、具体的な方法については述べていなかった。これらのことから、記述によるふりかえりを行うことで、今自分ができていることと、できていないことを自覚することができるように、教師は子どもの実態をしっかりとつかむことができる。また、技能の習熟を図る際に交流を取り入れることが効果的であることもわかる。

5 成果と課題

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

家庭科では、題材終末時に自分の生活の中で実践することを考え、生活場面をふり返った上で課題を設定している。①の実践では、題材導入時に省察を行った。子どもが、第5学年における食領域で何を学習したのか、家庭でどのようなため料理を食べているかをふり返ることで、本題材の課題を明確にし、課題意識をもつことができた。さらに、教師が子どもの実態を把握し、子どもの実態に即した題材計画を立てることもつながっていった。省察した結果、ゆでる時間や順序などと比較し、切り方については十分に身に付いているとはいえない実態から、切り方について考えることができるよう、いためる調理に用いる食材を、にんじん、ピーマン、もやしとした。これらの食材を用いた三色野菜いためを調理することにより、いためるポイントとなる切り方、いためる時間、順序についてしっかりと考えることができた。また、自分の生活での実践について計画する際には、省察で考えたことをふり返った上で考えている様子が見られた。

試し調理をする前には、題材を通してめざす野菜いためを試食している。子どもが題材のゴールをイメージし、目的意識をもって調理実習に取り組むことができ、いためる調理の特性を理解した上で、いためることができるようになった。これらのことから、題材のゴールをイメージし、課題意識・目的意識をもって学習することは、よりよい未来を志向する子につながると考える。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

実感の伴った理解につながったり、日常生活に必要な知識及び技能を効果的に身に付けたりするために、ペアやグループでの活動を取り入れ、友達と交流しながら多くの活動に取り組むことができるようにしている。①の実践では、野菜のための試し調理をペアで行い、十分な活動量を確保することで、いためる調理の特性をしっかりと理解することにつながった。②の実践では、手縫いのポイントについて全体で交流を行うことにより、これまで気付かなかった視点で手縫いのポイントについて試すことができ、技能の定着につながった。これらのことから、友達と交流し、多様な視点で生活事象を見直すことは、よりよい未来を志向する子を育成するために有効な手だてであると考えられる。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

先に述べたように毎時間記述によるふりかえりを行い、題材終末時に省察を行った。ふりかえりを行うことにより、自分の考えを再構成したり、次時に向けての学習意欲を高めたりしていた。省察を行うことは自分の生活での実践につなげるだけではなく、未来の自分の生活について考えることにもつながった。また、わかったこと、できるようになったことを1枚のワークシートに書き足していく方法も自己の成長を実感することができ、有効であった。

L・F・Tの3点に分けて、ふりかえりをワークシートに記述した。グループ活動が多い学習では、Fについて詳しく記述することで、子どもが自分の中で学習したことを再構成したり、子どもが学んだことを教師が把握したりする上で大事な点であると考えられるが、十分な記述ばかりではなかった。そのため、グループ活動が多い学習では、文言を「友達に教えたこと、友達に教えてもらったこと」にし、Fを中心にふりかえりを行うことが、自分の考えを再構成することにつながると考える。

また、くり返し学習することで技能を身に付ける衣食領域の学習では、技能の観点別によるふりかえりを行うことで成果が見られたことから、観点を吟味し、これからも続けていきたい。